

おわりに

大昔から、社会と大学との関係が様々な局面で語られ、議論されてきたものの、必ずしもそれぞれのセクターのコンセンサスを得る努力をしないままに両者の主張を繰り返す面もあった。大学も都合の悪いことを他人事のように聞き流してしまう体質をおおいに改めるべきであろう。次の時代を担う人たちを育てるのは、大学だけの責任ではなく迎える社会の責任でもある。常に大学と企業の双方が、研究だけでなく教育についても真摯に議論を交わす場を作るべきである。

ところで、近年、附置研究所の存在意義を問われることが多くなってきている。大学は、教育の場であり、研究の場であることは誰しも認めるところである。研究所は研究を中心とする場であり、「それだけならば大学に必要なのでは」という論理もあるであろう。しかし、学部や大学院の研究科は両方の機能を持っているものの、独立法人化以降猛烈に雑用が増え始めており、研究に割く時間が相当削減されてきている。これは長期のスコープを持って研究を続けなければ不可能ともいえる「新分野の確立」を教育の実践の場に期待するのは酷といっても過言ではない。言い換えれば、最先端の研究を推進できる研究所の大きな役割の一つとして、この重要性は今後増すことは間違いない。資源化学研究所は、この一翼を担うのは当然のことといえる。本文では、社会的な役割として戦略的な研究テーマの推進を取り上げたが、附置研究所の学問的課題にあえてこの問題にも言及した。

資源化学研究所は、研究を礎にして社会への展開をめざした総合力を発揮したい。

今回の外部評価委員の先生方は、産学の内情にも長けた方々であり、極めて意味深いご意見をたくさん頂いた。外部評価委員の先生方、とりわけ委員長の徳丸克己先生の献身的なご努力に、深く感謝申し上げたい。